

今までは、まだ学習したことのない漢字、初めて見る漢字は、先生に教へてもらふか、辞典で調べるかしなければ、読めないもの、<sup>わか</sup>解らないものと決まっておりました。しかし、漢字の大部分は“会意”であり、かつ“形声”をも兼ねておますから、その構成法が解りますと、初めて見る漢字でも、どういふ意味で何と発音する字か、大よその見当がつくやうになります。

石井方式漢字学習を実践してある幼稚園でこんな事がありました。先生が“悪魔”といふ字を教へようと思って黒板にこの字を大きく書きましたが、読める子があるかも知れないと思ひ、「この字、読める子ある？」と尋ねました。しかし、読める子はおませんでしたので、「では、この字は何といふ字か教へてあげませうね」と言ひますと、「先生、待つて。<sup>ぼく</sup>僕たちに考へさせて」と言つたさうです。

先生は「知らない字をいくら考へたつて読めるやうになる訳がない」と思ひましたが、言はれるままに待つたさうです。すると、子供たちは相談を始め、「下の方に“鬼”といふ字があるよ」「だから、鬼の仲間には違ひない」などと話し合つて、たうとう「先生、その字は“アクマ”ではありませんか」と当ててしまったさうです。

“魔”は“麻(マ)”と“鬼”との会意兼形声字だといふことが<sup>わか</sup>解れば、「人の心を<sup>まひ</sup>麻痺させる力を持った鬼」だといふことが解りますが、さういふ事を知らない幼児でも、これだけの推理が出来るのは漢字なればこそでせう。

ですから、脳の発達のも目覚ましい幼児期に漢字を学習しますと、推理力が自然と驚くほど発達します。漢字を知識として身につけることよりも、この力がつくことの方がずっと重視されてよいと思ひます。

まづ“構造”の“構”といふ字を例に考へてみませう。“𣎵(コウ)”と“木”との会意兼形声字で、“𣎵”は「木の棒を上下左右にさし渡し、組合せた形」を表した字ですから、“構”は、文字通り、「木の棒を上下左右にさし渡し、組み立てること」を表した字だといふ事が<sup>わか</sup>解ります。

さうすれば、“講”といふ字は、「言葉を組立てて、その言葉を話し手が聞き手にさし渡すこと」だといふことが<sup>わか</sup>解ると思ひます。“講話”とか“講義”といふやうに使はれる字です。

また、“購”といふ字は、“貝”が“財貨”といふやうに“お金”の意味を表す部首<sup>ぶしゅ</sup>ですから、「買ひ手が売り手にお金を渡して、その代りに売り

手が買ひ手に品物を渡すこと」だといふことが解るでせう。

また、“溝”といふ字は、「こちらにある水に向ふの方へさし渡すための“みぞ”」を表した字だといふことも、容易に察しがつくことと思ひます。

このやうに、“溝”といふ部首の持つ基本的な意味や発音を理解するならば、それが別の部首と組合はさっても、その部首の意味と組合せて考へてみれば、初めて見る漢字でも、その意味も発音もかなり正確に推察することが出来るものです。

今までは、“構・講・購・溝”といふ、言はば同族の文字を、お互ひに関係なくバラバラに学習して来ましたが、さういふ学習の仕方では、一字を覚えるのにも骨が折れ、またその時は覚えたやうでも、間もなく忘れてしまひがちです。

ところが、このやうに同族の言葉を、その構造の基礎から関係づけて一緒に学習するならば、よく理解できて容易に覚えられ、しかもしっかりと覚えられて忘れることもないと思ひます。

よくテストに出題され、誤まりやすい漢字に“探検”の“検”と、“冒険”

の“険”、“試験”の“験”があります。ことに、“探検”の“検”といふ漢字は、“冒険”の“険”と紛らはしくて、今では、辞典でさへ“探険”といふ書き方も載せてあるほど混同されてしまつてゐます。しかし、“検”と“険”とは全く意味が異つてゐますし、その違ひを部首の構造から理解するならば、間違ふことは絶対に無くなります。今までのやうに丸暗記したのでは、どちらが“検”で、どちらが“険”だったか、解らなくなるのが当り前で、間違へても不思議はありません。

さて、これらに共通した部首の“𠂔”は、旧字体では“僉”で、𠂔と𠂔と从との会意形声字です。今の字体も、𠂔と口と人との会意形声字ですから、基本的には同じ構造です。

𠂔(シュウ)は、𠂔(衆の本字で、中国の簡体字ではこれを採用してゐます)や𠂔(集の本字、木の上に隹[とり]が集まつてゐる形を表した会意字)を符号化した字で、人や鳥に限らず、広く物事の“集まり合ふ”ことを表した部首です。“会”や“合”の𠂔がこれです。

さうしますと、“僉”は、「人々が集まつて口々に意見を発表し合ふこと」を表した字であることが解ると思ひます。『平家物語』などの古典に「公卿僉議」といふ言葉が出て来ますが、それは「公卿(三位以上の高

官)全員が集合して意見を発表し合ひ、大事を決定する会議」のことだといふことも想像がつくでせう。

さて“検”といふ字は、この僉と木との会意兼形声字ですが、この“木”は“竹”と同じく“記録”を意味するものです。紙が発明されるまでは、“竹のふだ(簡と言ひ、今でも書簡といふ言葉があります)”や“木のふだ(札と言ひますが、木簡と言ふこともあります)”に文字を書いてみたからです。

従って、“検”は多くの「記録を集めて、事の真相を“しらべる”こと」を表した字であることが解ります。“探検”は、「探りしらべる」といふ意味の言葉です。

ところで、多くの記録を集めて“しらべる”といふことは、多くの中からたった一つの真実を選び出すことですから、“選ぶ”といふ意味があり、また、それは「きびしい選択」を要求されますので“きびしい”といふ意味もあります。

“儉”といふ字は、「人が生活をきびしく選択する」といふ意味の字で、いろいろな生き方の中から最も大切なものだけを選んで、無駄のない切り詰めた生活をすることを表したものです。“儉約”などの言葉があり

ます。

“険”といふ字は、“𡵓”と“𡵓こざとへん (小里偏と呼ばれますが、崖がけの形を象った象形字です)”との会意兼形声字で、「多くの崖の中でも最もきびしい崖」といふ意味を表した字です。それで“危い”所なので“危険”といふ言葉があるわけです。“冒険”とは「危険を冒す」といふ意味の言葉であることがお解りになると思ひます。

先に、“探検”を“探険”と書き誤ることが多いと言ひましたが、“タンケン”といふ言葉は“北極探検”といふやうに、冒険的な行為どもなを伴ふことがあって、そのため“険”と誤りやすいのだと思ひます。

しかし、“探険”では「危険を探る」といふことになり、「危険を冒して探る」といふなら意味が通じますが、“探険”ではやはり表現が足りません。もともと“探”と“検”とは対になる字で“探検”でなければ意味が正しく表現できないことが、お解りいただけると思ひます。

さて、“験”といふ字は、「多くの馬の中から良い馬を選ぶこと」を表した字だといふことは、もうお解りのはずです。馬は毛並みや体格など、外見だけでは良い悪いの見分けが付きません。それで駈かけさせて“ためし”てみます。それで“ためす”といふ意味に使はれます。“試験”は

“ためす”ことですが、「学力をためす」ことは「選抜する」ためであることは<sup>もちろん</sup>勿論です。

漢字の見方、考へ方は、以上で大よそお解り<sup>わか</sup>いただけたと思ひます。かういふ学習をなさりたい方は、拙著<sup>せつちよ</sup>『常用漢字学習辞典』(三省堂)を御利用下さい。普通の漢字辞典と異り、調べる<sup>わか</sup>ことよりも漢字を学習することをねらって、さし絵のやうに、同族の漢字が関連して<sup>しよ</sup>一緒に習得できるやうに編集した、正に石井方式漢字学習辞典です。